

Eureka XI

六年制通信 No.24 令和5年11月2日(土)号

時間をかける

毎年三重中学校・高等学校六年制の説明会を学校の内外で行っているのですが、先月の22日(日)で今年は終了しました。小学生の保護者を対象に、三重中高の魅力をお話しています。その冒頭で私は日頃先生方や君たちに話していることをできるだけ詳しく正直にお伝えしています。「辛抱強く学ぶ意欲を身につけること」、これが中高六年間で達成すべき目標だと、先生も生徒もこのことを了解事項として学校生活を送っていると、どこへ行ってもそう話しています。何でも効率よく簡単に身につく、そんな勉強法などないことも話しています。簡単に短時間で得られたものは、知識だけでなく筋肉でも同じで、これまた簡単に短時間で失います。最近では映画でも何でも録画しておいて倍速で観るらしいのですが、私たち人間には「物事を理解していく適正なスピード」があると思います。2倍速で観たからといって2倍早く理解できるものではありません。いや、あらずじだけわかればいいのだと言う人がいますが、それは鑑賞とは別次元で、小説のダイジェストを読んで全体を読んだ気になっている人と同じですね。愚かな錯覚です。時間をかけて読むとか観るとか、そういうことを軽視してはいけません。何をそんなに焦っているのか知りませんが、大人も子どもも、世間はいつも何かしらにイラついているような気がしてなりません。私は昨今の、大人が幼児化している現象も気になりますが、何でもいわゆるタイパ(コスパの時間版)の善し悪しを判断材料の上位に置いている風潮も気になります。タイパなど、教育の分野には馴染まないのではないかと、そう思いませんか。同じ効果を短時間で得られればタイパがいいわけですから、何でも時短という発想になります。さっさと片づける、そんな発想に向かうわけですが、しかし時間を大切にすることとは、時間をかけないこととは違います。そうではなくて、時間をかけて勉強することが時間を大切にすることです。ここを間違っただけはいけません。ですから今こそ落ち着いて、静かな環境の中で、孤独な時間を持ち、ゆっくり勉強したり本を読んだり映画を観たりしてほしいと思います。

時間をかけるということ思い出しました。前にも紹介したかもしれませんが、阿川弘之の『大人の見識』に吉川幸次郎の言葉として温故知新の温を「たずねる」としたわけが書かれています(p.189)。「温とは、肉をとろ火でたきつめて、スープをつくること。歴史に習熟し、そこから煮詰めたスープのような知恵を獲得する。その知恵で新シキヲ知ル」わけです。肉を煮つめていい味のスープを取ろうと思ったら強火ではいけない。歴史を勉強するのも、にわか勉強で手早く片づけようとしてはいけない。だから孔子は温の字を選んだと、吉川先生は言うわけですが。強火だと短時間で肉はほぐれる

かもしれませんが、いい味のスープは取れない、弱火でじっくりと時間をかけないとダメだと。なるほど、この解釈は強い説得力をもって迫ってきますね。時間をかけるというのは「辛抱強く」なければできません。もちろん、例えばいい本に出会って、読むのが楽しくて時間を忘れてしまったというのが理想ですが、勉強となると楽しいばかりではないですからね。何時間も集中力をもって勉強する人は辛抱強いに決まっています。君たちには辛抱強い青年になって卒業して行ってほしいと強く思っています。

また、説明会ではいわゆるグローバル教育だの ICT 教育だの、そういう不易流行で言えば「流行」に当たる（と私が考えている）ような言葉は、むしろ否定的に話しています。時代が変われば、また新しい言葉ができるだけですからね。

私の教育に対する、というか勉強に対する原風景は学生時代の恩師です。先生は大正4年（1915年）のお生まれですから、先生が旧制高校に学ばれたのは昭和一桁でしょう。その頃は、今の暮らしの便利さも快適さも、そのほとんどがなかったはずです。そんな不便な時代を回想され、たまに語られる若き日の先生の刻苦勉励ぶりは、どんな時代にも通じる勉強の王道だと思いました。「その気になれば、どこにいても勉強できる」という言葉も何度も聞きました。真実ですね。勉強できない、あるいはしない、それを環境のせいにはしないと、何度も繰り返しておられました。

今週のおすすめ

・森 絵都 『カラフル』 （文春文庫）

大きな罪を犯して死んだ魂は輪廻のサイクルから外される。つまり二度と生まれ変われない。ところがそんな僕の魂の前に「おめでとうございます、抽選に当たりました！」と言って天使が現れるところから物語が始まる。天使が言うには、今ちょうど死にかかっている体があるから、ちょっとそこへホームステイしてきなさい、と。そして一年以内に自分の犯した罪を思い出せたら輪廻のサイクルに戻してやろう、というわけ。これは天使のボスの命令ですから拒否権はない。選ばれたのは中学三年生の男子で、自殺未遂をして病院のベッドに横たわっている。その体に僕の魂が入ったのは、医者が男子の死を宣告して10分後。当然ながら大騒ぎ、生き返ったのですから。僕は新しく小林真（まこと）として生きることになるわけですが、父のこと、母のこと、兄のこと、好きな子のこと、それらの人間関係を真ではなく僕が目目で再構築していく。

「僕の犯した罪」を私も推理しながら読みました。当たりました。嬉しい。

「カラフル」というタイトルも納得です。確かにモノクロに見える人生もよく見ると実にさまざまに彩られていることに気づく。それに気づくことが若者の成長、そう言えるかもしれないと思いながら読みました。そして、この物語のキーワードは最初と最後出てくる「ホームステイ」ではないかと思いました。もしも今とても苦しんでいる若者がいたら、この本を読んで、このキーワードの意味を知れば、ずいぶん気が楽になるのではないか、そう思いました。この考え方がなかったら「老若男女に読み継がれる不朽の名作」なんて言えないだろうとも思いました。いい本ですよ。

BGMは アリス の さらば青春の時 でした…。